

「驚きの情報大国フィンランド」(平成28年6月)

北欧諸国の1つであるフィンランドは、面積が日本よりやや小さい約34万 km^2 で、人口はおよそ550万人です。首都ヘルシンキは、同国のほぼ最南端に位置しますが、その北100 km 程の所に、ラハティという人口約10万の地方都市があり、ラハティ応用科学大学が立地しています。岡山県立大学とは、デザイン分野を中心に交流の可能性があることから、英国ウェールズのバンガー大学訪問の機会を利用して、日本への帰途、同大学に立ち寄ることとしました。マンチェスター空港からヘルシンキ空港までは、直行便で所要約3時間です。日本と英国の間の航空路は、ちょうどフィンランドの上空辺りを通過することから、最短距離での移動となりました。

首都の空港ターミナルでは、いきなり無料の無線LAN(フリーWifi)につながりました。それは、ヘルシンキ市街地までの空港連絡バスの中でも、ヘルシンキからラハティまでの高速鉄道(時速約200 km で走りました)の列車内でも同様でした。とりわけ、空港連絡バスの車内では、地図上にバス路線とバス停が表示され、どこを走っているかがリアルタイムで分かるようになっていて、助かりました。街中では、デパートも本屋さんも店内はフリーWifiで、トラムの停留所では、何分後にどこ行きの電車が到着予定なのかを表示していました。

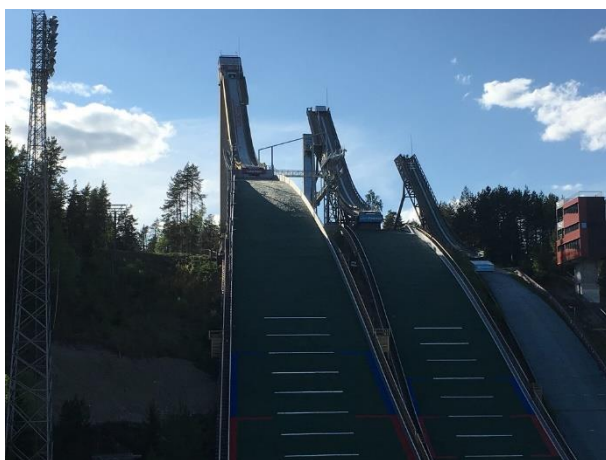
最も驚いたのは、ホテルの利用システムです。予約と料金支払いについては、日本からインターネットで行いました。ここまではごく普通です。宿泊当日の朝になって、部屋番号に加え、5ケタの自分専用の「ドア・コード」が、マンチェスターにいた私宛に電子メールで届きました。これにより、ヘルシンキのホテルのあるビルの玄関、部屋がある階の入口、自分の部屋のそれぞれのドアを、自分自身で開け閉めするというシステムです。そのため、ホテルには管理人さんが誰もいません。私自身生まれて初めての体験であり、近未来の日本の様子を、フィンランドで垣間見たような気分でした。

フィンランドでは、デザインのセンスの良さにも随所で気付かされました。フィンランド航空の機内で使われている食器類のデザインに始まり、バスや列車の外観や内装、ホテルでは、カーテンやベッド・カバーのデザイン、室内に飾られている絵画や写真、置物など、いずれも素晴らしいものでした。



ヘルシンキには、「デザイン・ディストリクト」に選定された地区が幾つかあり、このエリアのお店では、外観は言うに及ばず、ウィンドウのディスプレイも本当に見事で、訪れた者を引き付けてやまず、思わずカメラのシャッターを押し続けていました。形や模様だけでなく色使いも本当に素敵で、見ていて楽しい気分になるものばかりでした。辺りを眺めてみると、建物などの人工物と木々等の自然との調和やコントラストに、しっかり気を配っているのがよく分かります。私が訪れた5月中旬は、街路樹が芽吹き始め、一つひとつの葉が、日に日に目に見えて大きくなっていく、そんな季節でしたが、新緑の並木の中の専用軌道走るトラムの姿には、まさに感動しました。

ヘルシンキやラハティは、北緯60度以上に位置し、日本近辺で言うと、樺太よりもはるかに北になります。春から秋は昼間が長いかわりに、冬は暗い時間がずっと続きます。そのため車はすべて、1年中、エンジンを掛けるとスモールランプが必ず点灯するよう整備することが、法律で義務付けられているそうです。



訪問時の日の入り時刻は、夜の10時頃でした。ラハティの市街地は、森を切り拓いたように広がっており、大学での打合せを終えた夕方から、街の周りを徒歩で散策・探検してみました。ここでは、スキーのジャンプ競技の世界・カップ大会も毎年2月に開催されており、3本のジャンプ台が並んでいる会場は、歩いて行ける所にあります。そのすぐ近くには美しい湖もあって、「森と湖の国」フィンランドの魅力を、文字通り肌で感じることができました。